

## 平成現代語の研究 村上春樹著作集を読む

萩原 義雄

## 村上春樹プロフィール

- 1949……京都市伏見区に生まれる  
 1955……西宮市立小学校入学  
 1961……芦屋市立精道中学校入学  
 1964……兵庫県立神戸高等学校入学  
 1968……一年の浪人生活を経て早稲田大学第一文学部演劇科入学。しかし学校には殆ど行かず、新宿でアルバイトをして、その合間に歌舞伎町のジャズ喫茶にいりびたる  
 1971……陽子夫人と学生結婚。文京区で寝具店を営む夫人の実家に居候  
 1974……ジャズ喫茶「ピーターキャット」を国分寺で開店  
 1975……早稲田大学第一文学部演劇科卒業  
 1979……神宮球場のヤクルトⅡ広島戦でヒルトンが二塁打を打った時に突然「そうだ、小説を書こう」と思ったち、毎晩キッチンテーブルで書き続け「風の歌を聴け」で群像新人文学賞受賞

- 1981……専業作家になることを決意。店を人に譲り千葉県船橋市に転移。「一九七三年のピンボール」「夢で会いましょう」刊行  
 1982……『羊をめぐる冒険』刊行  
 1983……『中国行きのスロウ・ボード』『カンガルー日和』『象工場のハッピーエンド』刊行  
 1984……『螢・納屋を焼く』その他の短編『村上朝日堂』刊行  
 1985……『世界の終わり』とハードボイルド・ワンダーランド』『回転木馬のデッド・ヒート』『羊男のクリスマス』刊行  
 1986……『パン屋再襲撃』『村上朝日堂の逆襲』『ランゲルハンス島の午後』  
 1987……『日出る国の工場』『ノルウェイの森』刊行  
 1988……『雨天炎天』『ダンス・ダンス・ダンス』刊行  
 1989……『村上朝日堂はいほー！』刊行  
 1990……『TVピープル』『雨天炎天』刊行  
 1992……『国境の南、太陽の西』刊行  
 1994……『やがて哀しき外国語』『ねじまき鳥クロニクル1部・2部』刊行  
 1995……『夜のくもざる』『ねじまき鳥クロニクル3部』刊行  
 1996……『うずまき猫のみつけかた』『レキシントンの幽霊』『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』刊行  
 1997……『アンダーグラウンド』刊行  
 1998……『約束された場所で』刊行  
 1999……『スプートニクの恋人』刊行

## 比喩表現集

『パン屋再襲撃』 「文春文庫」

○目を覚ましてしばらくすると、『オズの魔法使い』にでてくる竜巻のように空腹感が襲いかかってきた。(P12)

○我々の生活はひどく忙しく、立体的な洞窟のようにごたごたと混みいつており、とても予備の食料のことまでは気がまわらなかった。(P13)

○僕がビールを飲んでいるあいだ、彼女は十一月のリスのようにこまめに台所の棚を探しまわり、袋の底にバター・クッキーが四枚残っていたのをみつけた。(P15)

○しかし残念ながら缶ビールもバター・クッキーも、空から見たシナイ半島のごとき茫漠ぼうぼくとした我々の空腹には何の痕跡も遺さなかった。(P15)

○それらはみすばらしい風景の一部のように窓の外を素速く通りすぎていっただけだった。(P15)

○時間は魚の腹に呑み込まれた鉛のおもりのように暗く鈍重だった。(P16)

○みぞおちの奥のあたりにぽっかりと空洞が生じてしまったような気分だった。(P16)

○眠気は海底地震によって生じた無音の波のように僕のボートを鈍く揺さぶっていた。(P20)

○それはまるで我々にかけてられた呪いのようなものだった。(p20)

○灰皿の中には六個のプルリングがそげ落ちた半魚人のうろこのように残っていた。(p21)

○まるでボートが何の支えもなくぽっかりと空中に浮かんでいるような感じだ。そして底にある小石ひとつひとつまでが、手にとるようにくっきりと見える。(p24)

○「何年も洗濯していないほころだらけのカーテンが天井から垂れ下がっているような気がするよ」(p24)

○僕がハンドルを握り、妻は助手席に座って、道路の両側に肉食鳥のような鋭い視線を走らせていた。(p25)

○後部座席にはレミトンのオートマテック式の散弾銃が硬直した細長い魚のような恰好で横たわり、妻の羽織ったウインドブレーカーのポケットでは予備の散弾がじゃらじゃらという乾いた音を立てていた。(p25)

○床屋の看板がねじれた義眼のように、闇の中に冷ややかに浮かんでいた。(p27)

○まるで夕食のおかずを告げるときのようなあっさりとしたしゃべり方だった。(p27)

○「マクドナルドはパン屋じゃない」と僕は指摘した。「パン屋のようなものよ」と妻は言って、車の中に戻った。(p27)

○銃は砂袋のように重く、夜の闇のように黒々としていた。(p29)

○しかしそれでも、営業用の微笑だけは明け方の三日月のように唇の端のあたりに不安定にひっかっていた。(p29)

○客席には学生風のカップルが一緒にいるだけで、それもプラスチックのテーブルにうつ伏せになって、ぐっすりと眠っていた。テーブルの上には彼らの頭がふたとストロベリー・シェイクのカップがふ

たつ、前衛的なオブジェのように整然と並んでいた。(P30)

三人はレジスターの前に集まって、インカの井戸を眺める観光客のような目つきで僕の構えた銃口をじつとみつめていた。(P30)

○妻はそれから荷づくり用の細びきの紐をとりだしー彼女は何でも持っているのだー三人の体をポタンでも縫いつけるみたいに要領よく柱に縛り付けた。(P34)

○新聞の読書欄には僕が読みたくなるような種類の本は一冊も紹介されていなかった。そこにあるのは「年老いたユダヤ人の空想と現実の交錯する性生活」についての小説とか、分裂症治療についての歴史的考察とか、足尾鋳毒事件の全貌とか、そういうものばかりだった。そんな本を読むくらいならまだ女子ソフトボール部の主将とでも寝ていた方がずっと楽しい。新聞社はきつと我々に嫌がらせをするためにこういう本を選んでいるのだろう。(P95)

○十一時になると僕はその女の子を送って彼女のアパートの部屋に行き、当然のことのようにセックスをした。座布団とお茶を出されるのと同じようなものだった。(P113)

そしてあとには漂白されすぎた下着のような暖かみのないがらんとした沈黙だけが、残った。白いシャツが草の根を煮たてている呪術師のような格好で東から西に向って飛んでいた。ぺらぺらとした細長いブリキの看板は肛門性愛の愛好者のようにそのひ弱な脊椎をのけぞらせていた。(P164)

### 『カンガルー日和』

○だから他人とうまくやっていくというのはむずかしい。玄関マットか何かになつて一生寝転んで暮らせたらどんなに素敵だろうと時々考える。(P41)

テレビ・カメラは静止したまま彼女の腰から上を我慢強い肉食動物のような視線でじつと捉えてい

た。(P56)

○あしかたという動物はどちらかというと一昔前の中国人みたいに見える。(P63)

○僕はそんな具合に二十一の冬から二十二の春までを、足の悪いおっとせいみたいに手紙のハレムの中で過ごした。(P99)

○ペン習字の見本帳のようなのっぺりとした顔だちではあつたけれど……(P178)

○機関銃というのはそのやかましさに比べてそれほどの効果があるわけではない。たしかにそれはミンチを作るのには適しているが人を正確に殺せる武器ではない。口数の多い女のコラムニストと同じだ。(P194)

○新月の夜は盲のいるかみたいにそつとやってきた。(P232)

### 『蛍・納屋を焼く・その他の短篇集』

○それが起こり得るのは、ある特定の場所で、ある特定の時期だけだ。それは「蜜柑むき」と同じことなのだ。(P52)

### 『中国行きのスロウ・ボート』

○僕はなんだか自分が歯医者椅子にでもなつてしまったような気がしたものだ。誰も僕を責めるわけではないし、誰も僕を憎んでいないわけではない。それでもみんなは僕を避け、どこかで偶然顔をあわせてもつともらしい理由を見つけてはすぐに姿を消すようになった。(P57)

○僕はあなたには返事を出さないことに決めました。だつて不完全な手紙を出すくらいなら何も出さない方がマシだからです。……完璧じゃないメッセージなんて、出鱈目な時刻表みたいなもんです。

( P 1 0 6 )

○正直に言って、僕はとても不満足です。間違えてあしかを死なせてしまった水族館の飼育係みたいな気分です。( P 1 2 1 )

○どれだけきちんとした形に整えようと努力してみても、文脈はあっちに行ったりこっちに行ったりして、最後には文脈ですらなくなってしまう。なんだかまるでぐったりした子猫を何匹か積み重ねたみたいだ。生あたたかくて、しかも不安定だ。( P 1 2 7 )

### 『TVピープル』

○長いあいだ彼らの動く姿を見ていると、だんだん僕の縮尺の方が間違っているみたいなきがしてきました。まるで度のきつい眼鏡をかけて、後ろ向きにジェットコースターに乗っているみたいな気分になった。( P 2 0 )

○……彼女は穏やかに、淡々とした口調でそう言った。そこには言い訳がましい響きはなかった。彼女は交通規制や日付変更線について話すみたいに客観的に結婚生活について語った。( P 5 8 )

### 『レキシントンの幽霊』

○僕がBMWの後ろに車を停めると、玄関の足拭きの上に寝そべっていた大型のマスチフ犬が、ゆっくりと立ちあがって、二三度、半ば義務的に吠えた。「べつに吠えたいわけではないのだけれど、いちおうそうするように決められているから」という風に。( P 1 2 )

○何の葛藤もなく、苦しみらしい苦しみもなく、すうっと消えているように死んでしまったのだ。誰かが裏にまわってそつとスイッチを切ったみたい。( P 1 2 9 )

みんな不思議なくらい似た外見をしていた。まるで項目べつに並んだ何かのサンプルの引き出しをひとつ抜きだして、そのまま持ってきたみたいに見えた。( P 2 0 6 )

### 『羊をめぐる冒険』

○彼女はカメラマンが忠告してくれたとおりましたしかにぱつとしない女の子だった。服装も顔つきも平凡で、二流の女子大のコーラス部員みたいに見えた。(上巻 P 5 2)

○彼は一人息子の写真でも見せるようににっこりと微笑みながらワインのラベルを僕に向け……。(上巻 P 5 5 )

### 『ダンス・ダンス・ダンス』

○ジャック・ロンドンの波瀾万丈の生涯に比べれば、僕の人生なんて檜の木のとてっぺんのほらで胡桃を枕にうとうと春をまわっているリスみたいいに平穩そのものに見えた。(上巻 P 5 3 )

男は捻挫した猫の前足を眺める獣医のような目つきで僕のはめているデイズニーウォッチをちらりと見た。(上巻 P 6 2)

○彼が優雅な手つきでガス・バーナーに火をつけるとみんなオリンピックの開会式でも見るみたいな目つきで彼を見ていた。(上巻 P 1 3 0 )

○五反田君はごく普通のグレーのVネックのセーターに、ごく普通のブルーのボタンドウン・シャツに、ごく普通のコットン・パンツをはいていた。でも、それでも彼は目立った。エルトン・ジョンが紫の上着にオレンジ色のシャツを着てハイジャンプしているのと同じくらい目立った。(下巻 P 1 6 3 )

『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』

○彼はキュウリが好きなようで、パンをめくってキュウリの上に注意深く適量の食塩を振り、ぱりぱりという小さな音を立ててかじった。サンドウィッチをたべているときの老人はどことなく礼儀正しいコオロギのように見えた。(上巻 P 80)

○デスクの上には彼女の読みかけの文庫本が眠り込んだ小型ウサギみたいな格好でつつぷしていた。(上巻 P 131)

○胃は外まわりの銀行員の皮かばんみたいに固くなっている。(上巻 P 259)

○ウエイターがやってきて宮廷の専属接骨医が皇太子の脱臼をなおすときのような格好でうやうやしくワインの栓を抜き、グラスにそそいでくれた。(下巻 P 266)

○なにしろ今回の出来事に関しては僕の主体性というものはそもそも最初から無視されているんだ。あしかの水球チームに一人だけ人間がまじったみたいなのさ。(下巻 P 272)

『国境の南、太陽の西』

○たいした話をしたわけではないのだが、僕の言っていることがまるで世界を変えてしまう大発見でもあるかのような顔をして熱心に聞いてくれた。(P 30)

○「そう、中間的なものが存在しないところには、中間も存在しないの」「犬が存在しないところは、犬小屋が存在しないように」(P 232)

『ねじまき鳥クロニクル』

○ウエイトレスがやってきて、僕の前にコーヒーカーップを置き、そこにコーヒーを注ぎ、まるで悪い御神籤を他人に押し付けるみたいにと、伝票差しに差して去っていった。(1巻 P 76)

○実際に僕が結婚の申し込みに彼女の家に行ったとき、彼女の両親の反応はひどく冷たいものだった。まるで世界中の冷蔵庫のドアが一度に開け放たれたみたいだった。(1巻 P 94)

○朝の九時半の彼のその安らかな小世界にとっては、僕の出現はギリシャ悲劇における不幸な知らせをもたらす死者の到来に似たものであったに違いない。(1巻 P 106)

○人々はみんな難しい陰気な顔をしていた。それはムンクがカフカの小説のために挿絵を描いたらきつとこんな風になるんじゃないかと思われるような場所だった。(2巻 P 101)

○「僕と君は意識の中で交わった」と僕は言った。実際に口に出してしまうと、なんとなく真っ白な壁の上に大胆な超現実主義絵画をひとつかけたような気分になった。(2巻 P 252)

○実を言うと私にとって眠れない夜はベレー帽の似合うおスモウ取りくらいに珍しいのです。(3巻 P 220)

『スプートニクの恋人』

○……そして気の利いた一節があるとそこに鉛筆でしるしをつけ、ありがたいお経みたいに記憶した。(P 8)

○それこそがまさにわたしの求めている人生なのよ。それに比べたら大学の文芸科なんてキュウリのへたみたいなものよ。(P 9)

○ものの言い方はなかなばけんか腰だった。なにかをけ飛ばしたいのだけれど、適当なものがないので、しかたなくぼくに質問しているみたいだった。(P 20)

○彼女は文章を書くことにまだじゆうぶん手慣れていなかったし、その文体はときどき、異なった趣味と疾病を有する何人かの頑固な婦人たちが一堂に会してろくすっぱ口もきかずに作りあげた。パッチワークみたくに見えることもあった。(P 21)

○「性欲のない作家にいったいどんなことが経験できるっていうの？そんなの食欲のないコックと同じじゃない」(P 25)

○「もう眠っていいかな？ぼくはほんとうに疲れているんだ。こうして受話器を手にもっていても、崩れかけた石垣を一人で支えているような気分なんだ。」(P 43)

○「元氣だよ。春先のモルダウ河みたいに。」(P 46)

○魚の切り身には、とても美しく焦げ目がついていた。芸術的と言ってもいいくらい端麗な説得力の○おそらく彼女は、今自分が手にしているものを寸分の妥協もなく護りきろうと決意しているのだろう。峠の砦にこもったスパルタ人みたいに。(P 51)

「くだらない冗談を燃料にして走る車が發明されたら、あなたはぜひぶん遠くまで行けるわよね。」(P 64)

○何と言え**ばいいのかわからなかった**ので、ぼくは黙っていた。広々としたフライパンに新しい油を敷いたときの**ような沈黙がしばらくそこにあった**。(P 78)

○本棚に入りきらない多くの本が**知的難民のように床に積み上げられていた**。(P 96)

○カフエに座った老人たちは、**長期的な視力のテストでもしているみたい**にまだ飽きもせず海を眺めていた。(P 134)

○時刻はもう八時をまわり空腹は今では痛みに近いものになってきた。肉を焼いたり、魚をあぶったりする香ばしい匂いはどこからともなく漂ってきて、**陽気な拷問者のように**ぼくの内臓を締め上げた。

(P 134)

○彼女はオリーブをひとつ口に入れ、指で種をつまみ、まるで詩人が句読点を整理する**みたい**に、とても優雅にそれを灰皿に捨てた。(P 137)

○すみれがパジャマのボタンをはめている姿は、まるで何かの**宗教的な儀式のように**見えた。(P 167)

『夢で会いましょう』

○そして僕は不親切な公認会計士**みたいな味のするパン**を口の中に放り込んだ。(P 94)

○シェービング・クリームにはどこかしらスコットランドの王子**みたいな趣**がある。(P 95)

○六月にデートした女の子とはまるで話が**あわなかった**。僕が南極について話している時、彼女は北極のことを考えていた。(P 171)

○彼女は小馬鹿にした**ような顔つき**で我々を見た。雨上がりの舗道に落ちているディスクの割引券でも眺めるような目つきだった。(P 197)

○彼女のテーブルの灰皿には半分に折れたマッチ棒がスペインの宗教裁判所の薪**みたいな形**に積みあげられていた。(P 199)

『夜のくもむら』

○その駅員は、まるで新聞紙を細かく刻んで皿に盛ったものを夕御飯に出された**みたい**な、すごく嫌になっちゃう顔をして僕に言う。(P 218)

○「はははははは」と芥子は声をあげて笑っていた。まるで「は」という字を**一列に横に並べて**、ひ

とつひとつ順番に読み上げているようなそんな笑い方だった。(P 228)

### 『象工場のハッピーエンド』

○おそろしくたてつけの悪いガラス戸は、開けてからきちんと閉めるまでに一週間はかかりそうな代物である。(P 64)

### 『うずまき猫のみつけかた』

○でも世間に流布しているそのような破滅的作家像は「ベレー帽をかぶった画家」とか「葉巻をくわえた資本家」と同じくらいのレベルのリアリティーを欠いた幻想であって……。 (P 8)

たとえて言うならば、ミネラルウォーターを使って歯を磨くような感じですね。まあたいしたことじゃないって言えば、たいしたことじゃないんだけど、でもそれなりの決断というものがそこには必要とされる。(P 112)

○……自分の過失だとわかってても毛ほどの反省はなく、やったことをやっていると強固に言い張り、やっけないことをやったと強固に言い張る。まさに悪夢の二倍返しのような女である。(P 162)

○猫に「後ずさり」を仕込むよりは小説家にムーンウォークを仕込むほうが、まだ少しは簡単なのではあるまいか。(P 168)

### 『村上朝日堂』

○三十年に一度しか優勝しないチームを応援していると、たった一回の優勝でもするめをかむみたい  
に十年くらいは楽しめる。(P 17)

### 『村上朝日堂の逆襲』

○よく女の子が1960年代に「私もあなたのこともちろん好きだけど、まだ良いお友だちのままで  
いたい。ね。」というようなことを言ったけれど、とにかくまあそういう具合に僕の眠りは僕のスト  
レスときちんと一線を画しているわけである。(P 234)

### 『村上朝日堂はいほー!』

○僕も一度「あなたの幸福度は十点満点中の何点ですか？」というものすごい質問をされて困ったこ  
とがあった。そんなこと急に聞かれて答えられるわけがないじゃないですか。それはちようど「南極  
大陸の存在はあなたにとって十点満点の何点ですか？」と聞かれているのと同じことだからである。

(P 78)

○自分の好みの外見の女性に自分の好みの人格が備わっていないというのは、見てもなかなか切  
ないものである。……そういう女性を見ているときの心境は洋服屋でもものすごく気に入った服を見つ  
けたのにサイズがまったく合わないというときの心境によく似ている。あきらめるしかないというこ  
とはわかっているのだけど、心情的になんとなくあきらめきれないのである。(P 85)

僕はただでさえ晩年のリスミたいにいろんな問題をせつせと抱え込んでいる人間なのだ。(P 147)

### 『村上朝日堂はいかにして鍛えられたか』

○「それはそれ、これはこれ」である。冷たいようだけど、地震は地震、野球は野球である。ボート

はボート、ファックはファックである。(P 15)

○「ヤクルトの土橋ってなんだか信用金庫の外回りみたいなの顔してるじゃない。あんな顔して野球や  
ってるのって変だよ」……「でも古田ってさ、なんか過疎地の町役場の戸籍係みたいじゃない。あれ  
スターって顔じゃないよな」(P 19)

○しかし全国紙が、足並みそろえて同じ日に休むといのはちよつとヘンじゃないですが。……まった  
く小学生の風邪ひきじやあるまいし、なんでみんな同じ日に仲良く休まなきゃならないんだ。(P  
46)

○ささやかな個人的な体験から申し上げて、ある種のナイーブな感受性を抱えたまま僕の属する職業  
的社会で生き延びていこう試みるのは、消防士がレーヨンのシャツを着て燃え盛る火事場に飛び込ん  
でいくようなものである。(P 124)